

教員養成学部学生の資質能力の育成についての研究

学生が運用するメールボランティアの取り組みを通して

Research about Cultivating of Student's Natural Capability
in Faculty of Teacher Training

馬場 敦義 (和歌山大学大学院教育学研究科)

BABA Atsuyoshi

野中 陽一 (附属教育実践総合センター)

NONAKA Yoichi

概 要

この論文は、メールボランティア活動を通して明らかになってきたことをメールボランティアからの電子メール（以下、メールログ）をもとに検討を行い、考察したものである。平成14年度からの学習指導要領では、「総合的な学習の時間」が全面的に実施されるようになる。それに伴い子どもたちの興味・関心・疑問に基づいた授業を計画し、行われることが多くなると考えられる。その際、子どもたちの学習を支援するメールボランティアが活用されることもあるであろう。そのようなメールボランティア活動に関わった学生は、子どもたちがどのようなことに興味を抱き、質問をするのかを学んだのであるが、そのこと以上にメールボランティアのサポーター（以下、めるぼAD）として関わることで身につけることができることが明らかになってきた。

キーワード：ボランティア、電子メール、ネットワーク

1. はじめに

メールボランティアの意義

子どもの興味・関心・疑問に基づいて授業を行うことは、授業者が授業を考える際に非常に大切にしている点であるだろう。しかし、一言で子どもの興味・関心・疑問と言っても、その内容には様々なものがある。そのため、教師ひとりではなかなかそれらの問い全てに答えを出すことが出来ない。そこで、子どもたちの問いを教師以外の人（外部人材）に教えてもらう取り組みが行われている。ゲストティーチャーとして地域の人を実際学校に招くなどの取り組みがその代表的なものである。しかし、わざわざ学校に来てもらうことは時間的に困難な場合が多い。そのことを解決した在り方の一つが、メールボランティアである。メールボランティアは、一般の大人の方に自分の得意とする分野の専門家になってもらい、子どもたちからの質問などに随時答えていくのである。メールボランティアを活用すると、子ども一人ひとりの問いに答えることができるだけでなく、直接専門家などの意見を子どもが聞くことができ、学校外からの教科書などには掲載されていない情報も入手することができるのである。子どもたちが、日常生活で不思議に思

うことを、一般に社会人との対話で刺激を受けながら、深く考えていく。そのような環境をインターネットで実現することを目標にしている。また、メールボランティアは子どもたちの疑問に答えるだけでなく、励まし、共に学びアドバイスをする“知のパートナー”としての役割やメル友（メール友達）のような存在となって気軽に話し相手になってあげる役割を果たすことも考えられている。

メールボランティアを活用して、子どもたちの学習を支援した研究や事例はこれまでも数多く行われている。例えば、不思議缶ネットワーク（美馬,1998）、子ども質問箱（高橋,1996）、こねっと チュータ（こねっと,1998）、不思議ネットワーク（こねっと,1998）などである。

例えば、不思議缶ネットワークは、コンピュータネットワークを利用して、子どもと若手科学者との対話の場を提供することによって、ネットワーク技術を利用した教育のあり方、科学教育のあり方、コミュニケーションと学びの関係を模索した取り組みである。ボランティアのメンバーは、湧源クラブという高校生のための科学セミナー参加経験者によって組織されており、子どもたちとボランティアは、電子会議室という特定の人しか入れない空間の中で、様々な意見交換を行っている。不思議缶ネットワークでは、子どもの科学に対する質問に答えつつ、問題へのアプローチの仕方などを提供することによって、「科学する」ことのおもしろさを伝え、広がりある科学の世界へ導けることを試みている。

また最近では、小学校が学校独自にメールボランティアを募集して組織化した事例や、市町村の地方公共団体単位で組織した事例も出てきている。小学校が組織している事例としては、滋賀県大津市の平野小学校、広島県安芸郡の江田島町立切串小学校などがあり、市町村が組織した事例としては、大阪府箕面市や和歌山県下津町などがある。

和歌山めるぼの組織化

メールボランティアを活用した実践事例はすでに紹介したようにいくつか出てきており、和歌山大学がある和歌山県でも下津町がメールボランティアを活用した実践を行っている。しかし、メールボランティアの取り組みは不思議缶ネットワーク等で紹介されているような教育的な有用性が認められているにもかかわらず、学校現場ではまだまだ認知されていない。また、子どもたちがメールを出すメールボランティアの組織自体もほとんどなく、不十分である。そこでわれわれ和歌山大学教育学部野中研究室は、和歌山県でもよりメールボランティアの取り組みが認められるように、和歌山県内の子どもたちと教育関係者全員を対象としたメールボランティアの組織を立ち上げた。それが和歌山めるぼ（以下、めるぼ）である。めるぼは、もちろん子どもたちの疑問・質問に答えていくボランティア組織であるが、それだけでなく、これまであまり接点がなかった学校と地域をつなぐ架け橋となる組織である。

また質問から回答までの一連のメールのやりとりが円滑にすすむようにサポートするスタッフが必要であった。そこで、野中研究室の学生を中心とするサポートメンバー“めるぼAD”も同時に組織化することになった。

教員養成系学部の学生として

学校現場では今、さまざまな教育的課題に適切に対応していくことのできる実践的指導力をもった教員を必要としている。そのため、教員養成系の大学・学部においてそれらの能力・資質を備えた教員の養成が求められている。

はっきり示されているのが、1997年7月の教育職員養成審議会第一次答申である。この審議会では、新たな時代に向けた教員養成の改善方策について様々な観点で提言を行っている。その中でも教員養成系学部が対象とされているものは、以下の二点であると考えられる。第一点は、「休業土曜日を活用した子どもたちと学生のふれあい」についてのことである。教員養成の段階において学生が種々の体験活動を通して、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力を身につけるような機会を設けることの大切さが指摘されている。それに基づき教員養成系学部ではフレンドシップ事業やスクールボランティアなどの取り組みが行われている。第二点は、「教員に求められる資質能力について」のことである。教員に求められる資質能力については細かな分析がされており、いつの時代にも求められる資質能力、今後特に求められる資質能力、得意分野を持つ個性豊かな教員の必要性が提言されている。さらに今後特に教員に求められる資質能力についての具体的な例も示されている。

新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第一次答申）

地球的な視野に立って行動するための資質能力

例：地球観、社会・集団における規範意識、思いやりの心、ボランティア精神、考えや立場の相違を受容し、多様な価値観を尊重する態度

変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力

例：個性、創造力、課題解決力、社会性、対人関係能力、コミュニケーション能力、ネットワーキング能力、自己表現力、メディアリテラシー、基礎的なコンピュータの活用能力

教員の職務から必然的に求められる資質能力

例：幼児・児童・生徒観、教育観、教職に対する熱意・使命感、子どもに対する責任感や興味・関心、子どもの個性や課題解決能力を生かす力、カウンセリング・マインド、地域・家庭との円滑な関係を構築できる能力

われわれが行っているめるぼは、以上の答申で提言されている資質能力を養うことができる取り組みである。どのような点からめるぼが、提言されている資質能力を養うことができるのかを、これまでのメールログから検討を行っていく。（メールログの中で登場するボランティアはすべて仮名である。）

2. メールログからの検討

社会での常識を学ぶ機会

From: "kuriyama" Sent: Saturday, October 07, 2000 10:38 PM

（注：最近のやりとりで、質問者にメールが届かなく、余り当件では部外者の会員にメールが届くという、システムとしては要件を満足していない構成になっています。お客様であれば、業者を変更されても致し方ない状態です。）

システムの専門家の立場から、偉そうなことと言って、申しわけございません。良きシステムにするには、その場しのぎではダメです。真剣に要件を整理する必要があります。

教育関係者ばかりの取り組みであれば、このような意見をもらえる機会はほとんど皆無である。

めるぼADの学生がいい加減な気持ちで運営していたということはないが、企業のシステムのように何度もテストをしたり、顧客のニーズに対応できるように絶えずシステムを検討してより良いものを目指していたとは言いきれない。どちらかと言えば、「とりあえずやってみよう。」「問題が起こってから何とかすればいい。」と思っていた。そのため、栗山さんが指摘されているような「お客様であれば、業者を変更されても致し方ない状況」であった。このような一見厳しい意見をもらえることは、教育界という一定の領域の中での取り組みでは経験することのできない貴重な経験である。

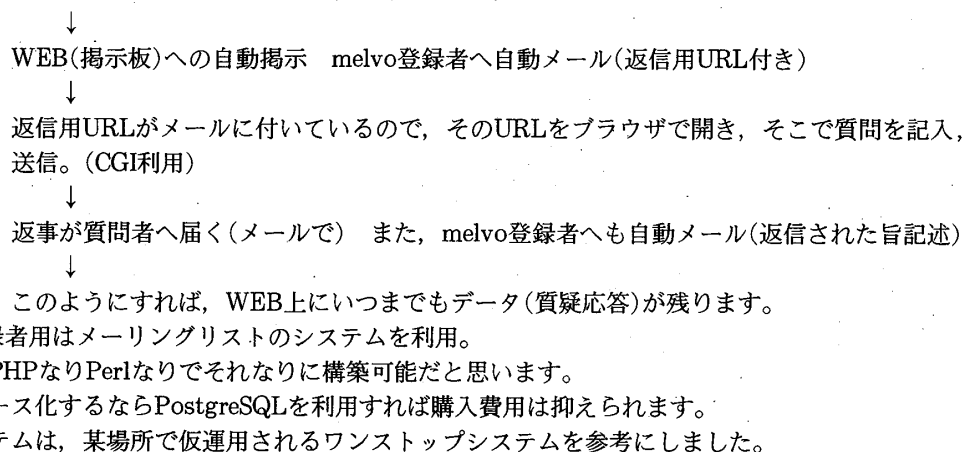
新しいシステムの模索

めるぼのシステムは開始当初から問題が表れてきた。一番の問題は、質問をくれた人に返事が返らないことがあることであった。この問題はめるぼの活動を開始する以前からわかっていたのであるが、われわれがボランティアに説明することで回避できる問題であると把握していた。しかし、実際は回避することができなかった。そこでめるぼADは、自分たちだけで新しいシステムの模索し、検討するのではなく、参加しているボランティアの方と一緒により良いシステムを構築することにした。そして、ボランティアの方に提案してみると、いくつかの方法を提案してもらうことができた。

From: "Tanaka" Sent: Sunday, October 08, 2000 6:09 PM
question@taro.edu.wakayama-u.ac.jpへの送信を、どうするか考えていってもいいと思いますが、質問する子どもたちにとっては、ボタンを押して送ったメールの回答者の回答を待っているわけですから、「本人のメールアドレスをHPの送信ボタンに入れる」というのが必須だと思いますが(――)先日は「とりあえず」と書いたのですが、「取り急ぎ」tagを書き直しての対応が必要だと思いました。いかがでしょうか？

From: "Yasu" Sent: Thursday, October 12, 2000 5:13 PM

質問者 → 特定のメールアドレス(質問用)へ質問を送信。



田中さんと安さんの提案は実に対照的である。田中さんはわれわれが考えていた方法と同じような発想に基づく方法である。子どもたちから実際にメールが届いていることもあり、見直すところはとりあえず問題となっている箇所を修正することにとどめ、それ以外の問題は返事を返す人(ボランティア)が柔軟に対応していくことでクリアしていく案を提案している。それに対して、安さんは返事を返すという一連のプロセス全体を見直したうえでより良い流れを提案し、さらに今後必要となるかもしれない機能も追加したより効率的なシステムを提案している。このよ

うな違いが表れるのは田中さんと安さんの個人的な性格の問題だけでなく、二人の職業も大きな影響を与えているはずである。田中さんは元々小学校の先生で、現在教育委員会の指導主事であり、教育関係の仕事に従事している。安さんは会社でコンピュータの仕事に従事している。学校の先生という職業はこれまで比較的社会とは垣根をもうけた場所で仕事を行ってきた。そのため、先生以外の職業の人と接する機会が非常に乏しかった。そのような機会の違いが考えの違いに結びついたと考えられる。

メールアドレスの公開について

新しいシステムを模索している段階で新たな問題が出てきた。ホームページ上にメールボランティアのアドレスを公開するか、しないかという問題である。その問題についてはメールボランティア間でも意見が分かれた。

From: "Nakata" Sent: Monday, October 09, 2000 12:21 AM

私は、基本的にはボランティアではオープンで良いと思いますが……。官公庁や学校や会社のメールを使われる場合は気を遣われる可能性があるのかなと思っていましたので、黙って様子を見ていました。必要な時に必要な形の連絡をしあう他のMLと様子が異なりますので。このメールも直接、馬場様だけにお伝えするのがネチケットでしょうが、仲間の皆さんの声が聞こえてこないであえて返信を使っています。

From: "Chii" Sent: Monday, October 09, 2000 12:38 AM

個人のアドレスのweb上への公開は私個人はいいのですが、本名とアドレスをセットで公開することはセキュリティーで守られた中以外では問題があるのかもしれない。web公開にはアドレスの方が必要で、本名公開が不必要ではないかと思っています。子供たちも疑問に答えたり、データ蓄積にはハンドルネームでも十分ではないでしょうか。

From: "Wasaki" Sent: Tuesday, October 10, 2000 8:05 PM

まず、アドレスの公開は必要でしょうか。

個人のアドレスを公開するのは慎重なほうがよいと思います。

私は今の野中先生の考えておられる形でいいと思います。

それから、システムについてですが、確かに皆さんのメールが全部入ってくるのは少々煩わしいところがあります。でも、そのおかげでめるぼの皆さんの考えや、動きがわかりますし、自分にきた質問でなくても、参考になるような資料や知識があれば、みんなでお手伝いできるのではないかと思います。それがこのようなシステムのメリットのような気がします。

もちろん人によって考え方が違って来る。自らの立場によって考え方が違うことが一般的であるから、様々な職業の人が参加しているボランティア組織においては、そのバラエティさはもちろん幅広くなる。運用しているめるぼADとしてはどのようにしてそれらをまとめ上げ、できる限りの人が納得のいくシステムにするかを調整する能力も求められることになる。

3. 取り組み後の展開と考察

学生が考えた問題点とその改善策

めるぼは、2001年の2月でスタートして一年が経ったのであるが、運営している学生達が当初考えたほど子どもたちや先生方に利用されなかった。そこでわれわれは、一年間の活動を振り返ることで成果をまとめると共に、利用されなかった問題点を話し合うことにし、それらを明らか

にした。さらに、それらを解決する方法について話し合うことで改善策をまとめ、次年度の活動につなげることにした。以下はその改善策である。

- 子どもからのメールに返信する方法の改善

まず最初に問題となったことは、子どもたちから届くメールにメールソフト（メーラー）の返信機能を用いて返信した場合、子どもたちに返事が届かないという問題である。これは、メールボランティアのメールアドレスを公開しない方法をとったことと、メールボランティアが子どもに送る返事の内容を他の人（返事を返したメールボランティア以外のメールボランティアとめるぼAD）にもわかるようにしたためである。この問題を解決するためには、返信のメールが自動的に子どもへと他の人へと送られる必要があった。それまで利用していたMacintosh上のメーリングリストサーバではそのような機能をさせることができなかったため、Linux上のメーリングリストサーバに変更し、それらの宛先変更作業をさせることにした。

- 電子メールでの活動の困難性

現在、学校では子どもたちが自由に電子メールを使えるような環境が整備されておらず、気軽にめるぼを利用することにつながらない。また、電子メールでは質問と答えのやりとりが単発になりやすいので、やりとりの中で互いの考えを深め合うことが困難である。そこで、掲示板をWeb上に設置することとなった。掲示板であれば、上記のような問題を解決することができ、さらにメールボランティアのメールアドレスを公開する必要がなくなるからである。しかし、電子メールによる取り組みをやめることは行わないことにした。電子メールではメールボランティアとの一対一にやりとりができ、子どもたちの情報活用能力を育成することにおいて非常に重要であると考えたからである。

- ホームページについての問題点

子どもたちがめるぼを利用して学習を進めるためには、必ずめるぼのホームページを利用する必要がある。しかし、それまでのホームページは子どもが利用することを十分に考えられていなかった。そこで、子どもたちが取つきやすいようにホームページ上の文字の数を減らし、イラストを中心としたものとした。さらに、見やすくするだけでなく、めるぼのホームページを訪れる人（学習者、ボランティア）のそれぞれの立場にあった、わかりやすいホームページにするためにそれぞれ人の使用別にホームページの領域をわけることにした。

- 知名度が低いことでの宣伝方法の工夫

もともとメールボランティアの取り組みを広めるために始めためるぼであるが、どうしても利用してくれる子どもたちが増えないでいる。ホームページから始めるめるぼの利用であるが、ホームページ上の宣伝・広報活動にとどまらず、本年度以上に積極的な働きかけを行うことを確認している。

学生の改善策とボランティアの提案の差

学生が問題点であると捉え改善策を出した点は、めるぼの発展のために確かに有効な方法である。一番目を除く3つの方法は、いずれも参加しているボランティアがメールボランティアとしての仕事を果たせるようにするためのものである。メールボランティアを組織化し、それに賛同

してくれた人にボランティアになってもらった経緯上、めるぼADはボランティアにメールボランティアとして子どもたちの学習を支援してもらうように工夫をしていかなければいけないからである。しかし、学生が考え出した改善策はこれまでボランティアから提案されたシステム改善の方法を十分踏まえていないのではないだろうか。提案してもらい、ボランティアと共に模索することでより良いシステムを構築していくためには提案してくれた案をもっと考慮していく必要がある。めるぼADである学生がボランティアからの提案に対して十分な配慮ができなかった理由として、次の点が上げられる。

第1に、これまでのメールのやりとりを十分把握せずに問題点や改善策を考えたためである。めるぼAD間での話し合いを重点的に持つことで、自分たち側からの観点でしか検討することができなかったことが考えられる。

第2に、学生がメールボランティアにすぐに返事を返すことができていないからである。日常的に接する機会のない人たちと共同作業をすることが慣れていないためにすぐにメーリングリストに投稿できないことや、一人の学生の投稿がめるぼADの考えとなってしまうことを必要以上に考慮してしまうことですぐに返事を返すことができなくなったことが考えられる。

以上の2点がメールボランティアからの提案に対して十分配慮ができなかった要因であるが、これらは今後取り組みを行っていく際に学生が注意することで徐々に解決されていく問題である。さらに、そのようにして徐々に解決していくことで学生はメールボランティアとの接し方を経験的に学んでいくことになるはずである。

4. おわりに

教員養成系の学生段階で学んでおくべきこと

これまでに紹介したように教育職員養成審議会の答申等に基づき、フレンドシップ事業やスクールボランティアなどの取り組みが行われている。それらの取り組みは子どもたちや学校の先生に直接関わることで、大学では感じることはできない生の教育を学ぶことができている。これらの取り組みは今後ますます重要性を持つていくことはこの論文で改めて語らなくてもよいであろう。しかし、それだけでは不十分であることを最後に指摘しておきたい。フレンドシップ事業やスクールボランティアなどは大学からは離れるが、結局学生が触れ合う人は先生をはじめとする教育関係者と子どもである。メールログの検討段階でも紹介したように、教育界で生活している人には良くも悪くもある程度教育界の考え方は染みついている。そのため、社会一般の考え方やギャップが出てきているのではないだろうか。今後、学校が地域と連携する機会は増大していくはずである。そのようになったとき社会一般の考えと教育関係者の考えが違ってしまっている、到底円滑に物事を進めることはできないであろう。そのようなことがないように教員を目指している学生の段階で教育関係者以外の人と日常的にかかわり、同じフィールドの上に立って教育を考えていく経験をしておくことが重要になってくるはずである。その一つの方法がめるぼに参加することであり、めるぼを通して教育を考えることである。

参考文献

[1] 馬場敦義 (2000) 「メールボランティアの学習支援に関する研究」, 和歌山大学教育学部卒

業論文

- [2] 美馬のゆり (1997) 「不思議缶ネットワークの子どもたち」, ジャストシステム
- [3] 子ども質問箱 <http://rika.ed.ynu.ac.jp/q/aboutq.html>
- [4] こねっと・プラン実践研究会編 (1998) 「インターネットが教室になった」, 高陵社書店, pp.198
- [5] こねっと チュータ <http://www.wnn.or.jp/wnn-s/tutor/ask2.html>
- [6] こねっと・プラン実践研究会編 (1998) 「インターネットが教室になった」, 高陵社書店, pp.158-pp.169
- [7] 永野和男監修 (1999) 「こねっと・プラン 学校で気軽に使おうインターネット」, 高陵社書店, pp.64-pp.68
- [8] 不思議ネット, <http://www.fushigi.net/>
- [9] 広島県安芸郡江田島町立切串小学校
<http://www.boe.etajima.hiroshima.jp/boe/school/kirisyou/index.htm>
- [10] 箕面市市民メールボランティア
<http://www.city.minoh.osaka.jp/edu-center/html/mail.html>
- [11] 下津町メールボランティア『simocom』
<http://www.shimotu.ed.jp/~simocom/index.html>
- [12] 文部省教育職員審議会第一次答申(1997)
http://www.mext.go.jp/b__menu/shingi/12/yousei/toushin/970703.htm